

名古屋大正期文芸雑誌考 (四)

木 下 信 三

『水郷』概観

既述の『沙漠』『明眸』『かもめ』などは、どちらかと言えば短歌系の文芸雑誌であったが、ここに取りあげる『水郷』は俳句系の文芸雑誌といつてよからうか。しかし、同誌の募集原稿は創作(文章)、詩、短歌、俳句を対象としており、閲覧の同誌第二号に限れば、特別に俳句に重点がおかれているわけではない。量的には俳句よりも短歌のほうが多いと言つてよい。俳句系文芸雑誌とは、ただ同誌の編輯人が俳人として高名な加藤霞溪であり、また同誌の同人である実兄の加藤霞村も名の知られた俳人であることから私の誤解または錯覚なのかもしれない。第二号以外の同誌を見て総合的に判断しなければなるまい。

さて、『水郷』第二号の発行は大正八(一九一九)年五

月一日。編輯人は名古屋市西区敷下町八三の加藤霞溪で、発行兼印刷人は西区大船町一ノ六・鈴木方の竹内闇路、印刷所が中区新栄町四丁目六の野崎印刷所、そして発行所は東区呉服町五丁目・木村方の水郷社である。

水郷社同人は、加藤霞溪、加藤霞村、竹内闇路、木村一葉、奥村樹美夫、船瀬繁吉、林嫩村、棚橋青蕪、高瀬静岳、西脇紅子、近藤勤の一人人で、特別社友として伊藤鳴風、杉浦孤月、加藤斗月がいる。雑誌サイズはほぼA5判、三六ページ、非売品である。ただし「水郷社規定」には「社費一ヶ月分金十五錢(外に郵税二錢)三ヶ月分(金五十錢)郵税共」とある。次は第二号の主な目次内容である。

山口桃源「初夏の夕に」小説、奥村樹美夫「敵に抱かれて」小説、加藤霞溪「或る日の沈黙」小説、左右亭選「雜詠」

俳句―霞村一三句・かけい一二句・嫩村一〇句・晴波七句・彩雲七句・馬川七句・栖火六句・朱鳥六句・峻溪六句・茂峰六句・桃源四句・闇路二句・一道二句・金緑城二句・青蕪二句・呼春一句、松本象「隠遁者」小品、平田彩雲「旅の春」俳句九句、山口桃源「水郷の発刊を祝して」祝詩、西脇紅子「夕ざれば」詩、稲塚芳洲「春愁」詩、林嫩村「青春」詩、山口桃源「真昼の夢」詩、短歌―加藤愁草「峽の春」一二首・永田真六「吾も人の子」一二首・生嶺京二郎「東海道より」一二首・小島露葉「この頃の日記から」一〇首・瀬木泰三「野間岬」一〇首・松本象「人にさかりて」五首・衣笠ふみ子「ふた川より」六首・船瀬繁吉「彼岸の別院」一二首・宮野春繁「歌巡礼」一二首・岩田吐秋紅「近衛衛戍病院より」二首・安藤青葉「夕暮」四首・林八重緒「噴水の朝」四首・竹内闇路「春」六首・近藤勤「郊外電車」六首・木村一葉「雑詠」一一首・伊藤鳴風「雪となるまで」一二首、杉浦孤月「再び恋をもとめんとして」小品、加藤霞村選「社友欄 春の水」俳句―かけい五句・嫩村四句・栖火三句・桃源二句・朱鳥二句・金緑城二句・青蕪一句・闇路一句・佳作―桃源一句・かけい一句、加藤斗月「星の光りを仰ぎつゝ、」小品、加藤芳影「夢を追ふ男」創作、霞村「水郷社例會」俳句二六句、宮野繁春「草萌ゆる頃」小説、「通信社友」、同人「編輯便り」、「水郷社規定」、永田真六「表紙画」木版、

広告・野崎印刷所

同人の林嫩村は「編輯便り」において同誌に対する意気込みを「草が緑に萌えて木の芽が處女の乳房のやうに膨らみ、凡てが凄艶に色づく」と色に憧れた人々が神秘的影に吸はれて行つて幻の様に踊り狂ふてゐます、ふつくらとした春の氣分が到る處に充ち満ちて、うら若い生命の衝動が大らかに波打つてゐます、とける様な春の紅い幫が到頭開かれたのです、私等は此の時華かな藝術の舞臺に心ゆく迄踊り青春の血の歌を高らかにうたはうではありませんか」と熱氣ある言葉で表現した。次に同誌中心人物のひとり加藤霞溪の小説「或る日の沈黙」の冒頭部分を写してみる。

青い柳に燕が飛ぶ春の港町のカフェーに伯母を訊ねて来た小柳は、今朝からの旅と見知らぬ國へ来たと云ふ淡い悲しみにひどく疲れてゐた、彼女は窓に身を擡げて、透き徹る様な海面をちつと見詰めた、そして此れから自分の力で生きて行くと云ふ何處かに不安のありさうな大きな希望に對して自分がそれだけの覺悟と力があるのかと思ひながら、細い弱さうな腕を撫で、見た。彼女は一種の淋しきと不安を心から離れる事は出来なかつた。

満年齢でいえば加藤霞溪一九歳の文章である。霞溪^かは明

治三三（一九〇〇）年一月十五日、名古屋に生まれた。本名は亮造、名古屋商業学校卒業。少年時代は大須賀乙字に、乙字没後は高浜虚子に師事した。昭和二（一九二七）年、兄の霞村と名古屋ホトトギス会を結成したが、同六年『ホトトギス』を離脱して『馬酔木』に拠り、同三年に『巖』を創刊した。戦後は『干渴』『荒星』を創刊。『馬酔木』を離脱して『天狼』に参加。句集『夕焼』『淨瑠璃寺』『淡彩』『生涯』『捨身』『壘』『種』など多くの著書がある。次に同人の俳句を一句ずつ紹介する。

大池の彼方に人や青き踏む
霞村
櫻幹に照る春月や觸れて見し
かけい
妹が乳の膨らみ見えつ春日影
嫩村
鐘つけば櫻花散る夕べかな
闇路
城は遠し花曇の路細々と
青燕

加藤霞村は明治三〇（一八九七）年二月一日の生まれで、本名は彦左衛門。虚子門。昭和九（一九三四）年、『ホトトギス』同人に推された。そして昭和二二年には『牡丹』を創刊主宰した。嫩村、闇路、青燕については分からない。ただ『水郷』第二号に〈大桶の下の小簍や百千鳥／蛤の殻捨て、ある川邊哉〉などの句が掲載された金緑城は詩人梶浦正之の若き日の俳号。明治三六（一九〇三）年九月、愛

知県海部郡佐織村勝幡に生まれ、『ホトトギス』のほか『海紅』『層雲』にも投句した。詩集『餓え悩む群』『鳶色の月』『春鶯』『豹』『青嵐』などのほか多くの著書がある。

商業学校と文芸誌

『鈴懸』第四号について紹介する。同号は大正八（一九一九）年八月一〇日発行、縦横186mm×112mm。一八ページ。値段は印刷されてないが、「清規」には〈會費一ヶ月十五錢〉とある。編輯兼発行印刷人は名古屋市中区東川端町七丁目一〇の水野謹吾、発行所は中区矢場町五之切五二・有元鉄工場方の鈴懸詩社、印刷所は中区新栄町四丁目六番地の野崎印刷所。『水郷』と同じ印刷所である。発行人の水野謹吾については後述予定の『素焼』の編輯人を務めている以外何も分からない。ただ、巻末の「鈴懸のさぐめき」には〈私達は皆商業学校の生徒です。將來は算盤をもつて立つべき運命のもとにあるものです。それ故青春の時代のみにも自分の趣味に生きやう自分の趣味に全力を注ごうと思つて作つたのであります〉と述べられている。しかし、「清規」には〈私達は藝術に生きむとする若人の集りです／何人といへども誌友にお迎へ致します〉とあるので、あるいは同じ商業学校の生徒に限ったグループではないのかもしれない。

商業学校生徒による雑誌といえは既述の『珊瑚星』があった。同誌は名古屋商業学校の卒業生と在学生によるものであったが、この『鈴懸』はいずれの商業学校生徒の手によるものか、閲覧の同誌第四号からは判明しない。

さて、この「鈴懸のさゞめき」には（六號までは前の通り廻覧誌にしようと思ひましたが、もうたえきれなくなつて飛び出しました。そして名前も『鈴懸』と改めました。鈴懸は洋名をプラタースと云ふ街路樹であることは既に御承知のこと、思ひます。従前の『ポプラ』よりこの方が奥ゆかしく響くではありませんか」とある。つまり、第三号までは『ポプラ』という名の廻覧雑誌であつたということである。次に第四号の目次内容を記す。

水野謹吾「ある少年の手記」小説、馬場武雄「白雨の如く」詩、横井彦太郎「田園の朝」小品、坂野秀朗「朝の街」小品、「古寶玉集」（短歌各一首）——坂野秀朗・馬場武雄・岡田重之・吉田清治・村手遼次・牧田撻七・佐藤庄一・水野謹吾・平野正、水野謹吾、大須にて「短歌九首、坂野秀朗」學期末「短歌八首、少年時事感想」坂野秀朗「平和を迎えて」・横井彦太郎「平和來と青年」、誌友「涼風信」通信文、「夏雑吟」——横井彦太郎一〇句・吉田清治六句・坂野秀朗四句、馬場武雄「黎明・電燈」詩、水野謹吾「歌の日記より」短歌七首、錦戸草之介「忘れ得ぬ人々」随

筆、きんご「鈴懸のさゞめき」後記、「清規」

次は中心人物である水野謹吾の「ある少年の手記」の書き出しの一節である。

電話室で母の聲が止んだと思ふと間もなく、書齋の障子があけて／『今長谷川さんから長坂さんの娘さんが死なれて今日の二時出棺だと通知して下さつたから、氣の毒だがお前一寸と行つて来てくれませんか』と云ひました。／『ハイ、行つてきませう』と私は事なげに答えました。／これが貴女の死を知つた時です。而しどうした私の心でせう。胸騒ぎもしなければ、涙一つも出ないのです。私の戀人が死んだのに涙一つとない木石漢でせうか。

個人的なことではあるが、この小説を一読して私の興味をひいたのは（やがて郊外の電車停留場で貴女の棺は葬式用の電車に乗りました）の部分で、当時、葬式用の電車が存在したという事実であつた。霊柩電車は全国で名古屋のみが存在した電車であつた。

『草の實』の世界

文芸誌『草の實』は全部で九冊発行されている。大正八年（一九一九）六月に創刊され、大正九年二月発行の第九号をもって終刊した。つまり休むことなく毎月発行された月刊誌であった。編輯兼発行者は掛布美夜路、発行所は名古屋市中区入江町一丁目・掛布方の草の實詩社。印刷者については創刊号には記載がないが、第二号によれば名古屋市中区小林町一二の三浦荒一で、第九号のみ同所の岡本仙峰となっている。雑誌サイズは縦横204mm×143mm。会費は一ヶ月一五銭、第七号より二〇銭となった。

創刊号の末尾に〈本誌取扱所〉として〈名古屋市中區南伏見町 竹中書店／名古屋市東區杉之町 高木書店〉の名がある。そして、第三号より〈名古屋市西區榮町 靜觀堂〉が加わり、第六号より竹中書店にかわって〈名古屋市東區鍋屋町 佐藤書店〉が取扱所となり、さらに〈一宮町 錦屋〉の名も見られる。

『草の實』の発行意図については特に掲げられていないが、「清規」には〈草の實詩社は限りなき藝術を讚美せむと高き理想を抱く者の集りです〉とあり、掛布美夜路は「編輯雜記」において〈小誌ではありますが同人誌友が常に純なる香り高き作品を發表すると云ふ事においては他の雜誌に劣らないつもりでございます〉と書いている。次は各号

の主要目次と発行年月日などである。

第一号 大正8年6月10日発行 26頁

むらさきのや「桐の花」短歌一〇首、掛布美夜路「小夜更けの空」短歌一〇首、稲垣南行「弱き男」短歌一〇首、夢久牧童「五月雨」短歌五首、露原京二「病める母」短歌四句、田川彌吉「赤光・秋風・日蔭の豆でも・冥慮」詩、夢久牧童「百合よ何をさ、やく」詩、掛布美夜路「午後」詩、大泉捨舟「夏の前」詩、石野鼎「腕、股、臀(一)」小説、山野鐘一「或る男からの手紙」小説、掛布美夜路「唾の死」小説、美夜路「編輯雜記」、「清規」、表紙画・暮路よのみ、掛布良胤・カット、広告・むらさきや

第二号 大正8年7月1日発行 28頁 15銭

田川彌吉「水は流れる」隨筆、山野鐘一「H・S」小説、むらさきのや「硯の海」短歌一〇首、掛布みよ路「舞姫」短歌一〇首、山野鐘一「小女の頬」短歌五首、星野幻之助「夏橙」短歌五首、一原實「白き虫」短歌六首、小川信夫「おさの小唄」短歌三首、池田多津緒「妾は片輪だもの」創作、田川彌吉「あめふる」詩、掛布みよ路「南国へ・煙」詩、夢久牧童「月見草」詩、美智正「初夏の町」詩、大泉捨舟「かなしみ」詩、盛川一「祭日の午前」小説、石野鼎「腕、股、臀(二)」小説、美夜路「草の實便り」、「清記」、表紙画・暮路よのみ、扉絵・掛布美夜路、

広告・むらさきや

第三号 大正8年8月1日発行 26頁 15銭

赤野陽一「雨」短歌一〇首、むらさきのや「雪のした」短歌一〇首、掛布みよ路「薬瓶の光」短歌一〇首、山野鐘一「燃ゆる唇」短歌一〇首、夢久牧童「夕暮」短歌五首、澤夢花「温泉」短歌五首、石野鼎「腕、股、臀(三)」小説、佐藤生粹「青蛙」詩、山野鐘一「Sの死」小説、掛布みよ路「思ひ出」詩、衣浦志運「二つの勞働」詩、押村月秋「夏の夜」詩、月秋「光る」短歌三首、池田多津緒「雷の鳴る日」小説、掛布みよ路「夢」小説、みよ路「草の實便り」、「清記」、表紙画・暮路よのみ、ルノール「編物する女」口絵

第四号 大正8年9月1日発行 28頁 15銭

暮路よのみ「郵便さん」童謡、赤野陽一「銀の雲」短歌一〇首、掛布みよ路「赤倉にて」短歌一〇首、山野鐘一「海邊の歌」短歌一〇首、小貫紫峰「旅情」短歌一〇首、夢久牧童「やわらかき香」短歌一〇首、榊原君影草「一人旅」短歌一〇首、山野鐘一「都の妹におくる」小説、押村月秋「寂しさ」短歌五首、奥村敏郎「みよ路へ」小品、掛布みよ路「白樺に」詩、館美智正「明に出しその日」小説、いしのかなへ「海へ」詩、池田多津緒「雷の鳴る日(二)」小説、「草の實便り」、「草の實詩社清記」、表紙画・暮路よのみ

第五号 大正8年10月1日発行 28頁 15銭

伊藤只聽「火の征矢」短歌一〇首、赤野陽一「蚊」短歌一〇首、むらさきのや「薄日」短歌一〇首、掛布みよ路「水平線」短歌一〇首、山野鐘一「白い風」短歌一〇首、夢久牧童「夕雲」短歌五首、星野幻之助「こほろぎ」短歌五首、奥田青羊「青き貝殻」短歌五首、澤夢花「木曾の夏」短歌五首、衣浦志運一「棗の木」短歌七首、岡田京治「晝月」短歌三首、鬼頭白雨「薄赤き月」短歌六首、小春篁夫「秋の陽」短歌四首、笹原賤夫「夜は淋し」短歌三首、小紫白汀「黄の波」短歌三首、牧野緑雨「巡禮」短歌三首、池田多津緒「北海道の友へ」小説、中島慶治「指輪」訳詩、押村月秋「夕の歌」詩、佐藤生粹「星」詩、衣浦志運一「魔の眸」詩、奥村敏郎「若き日」小品、掛布みよ路「寂しい」詩、山野鐘一「平戸の話」小説、「草の實便り」、「草の實詩社清記」、表紙画口絵・鈴木龍之

第六号 大正8年11月1日発行 30頁 15銭

敏郎「別れの夜」小文、赤野陽一「小田原小景」短歌九首、掛布みよ路「十月の空」短歌一〇首、西澤紅陽「狂女」短歌一〇首、山野鐘一「素袷」短歌一〇首、夢久牧童「教會の夕」短歌五首、館美智正「都大路」短歌五首、楊桐原萩村「岡崎を去りて」短歌五首、岡田京治「大銀杏」短歌五首、笹原賤夫「洋銀のフォーク」短歌五首、都築宙外「異郷の友に」短歌五首、池田多津緒「ある夕

に」小説、暮路よのみ「紅い提灯」詩、衣浦志運一「乞食の群とパン 百姓よ」詩、山野鐘一「ひあはひ」小説、奥村敏郎「ひとへ」小品、掛布みよ路「雨の夜」詩、石野鼎「魂の天に昇る記」小説、みよ路「草の實便り」、「草の實詩社清記」、セザンヌ「浴する人々エスキイス」口絵

第七号 大正8年12月6日発行 30頁 15銭

赤野陽一「故郷の秋」短歌八首、掛布みよ路「銀かんざし」短歌一〇首、掛布みよ路「カフエーの夜」短歌一〇首、山野鐘一「因縁」短歌一〇首、夢久牧童「青い小鳥」短歌一〇首、楊桐原萩村「入相の鐘」短歌五首、鬼頭白雨「夜の秋風」短歌五首、都築宙外「星稀れの夜」短歌五首、山崎駿一郎「悲しき心」短歌五首、寺澤さとる「旅の歌」短歌五首、牧野白虹「金魚の死」短歌五首、奥田青羊「白く光りて」短歌三首、小紫白汀「夕空赤し」短歌三首、村上泣果「晩秋」短歌三首、石野鼎「梟の森」小説、夢久牧童「さすらひ」詩、都築宙外「橋のたもと」詩、笹原賤夫「其の夜」小説、掛布みよ路「或る冷たひ日」詩、衣浦志運一「朝の労働者」詩、池田多津雄「冬」詩、山野鐘一「星のように」小説、敏郎「鎌倉より」小品、「會費改正について」、美夜路「草の實便り」、「草の實詩社清記」、表紙画扉画・鈴木龍之

第八号 大正9年1月1日発行 30頁 20銭

赤野陽一「ある朝」短歌一〇首、掛布美夜路「若き巡禮」短歌一〇首、奥村敏郎「鎌倉の海」短歌一〇首、山野鐘一「漂泊」短歌一〇首、寺澤さとる「蒼き夜と空」短歌一〇首、夢久牧童「むらさきの花」短歌五首、都築宙外「新らしき年」短歌五首、土田仙次「小春日」短歌五首、掛布ひとし「銀杏の葉」短歌五首、奥村敏郎「小糸」小説、衣浦志運一「寒星よ 十二月」詩、山野鐘一「晩春の午後」小説、掛布美夜路「風が吹く……」詩、山崎駿一郎「まぼろし」詩、都築宙外「かるた會」詩、館美智正「歸省」小説、「草の實便り」、「草の實詩社清記」、広告・むらさきや

第九号 大正9年2月17日発行 30頁 20銭

掛布美夜路「悲しき思出」小説、奥村敏郎「若き日」小説、赤野陽一「病床にて」詩、掛布美夜路「病める子」短歌五首、奥村敏郎「待合の時計」短歌四首、山野鐘一「トビラ」短歌五首、岩田繁「氷雨」短歌五首、山崎駿一郎「悲しみ」短歌二首、都築宙外「冷たき風」短歌二首、鈴木こうじ「コスモス」短歌二首、露原京二「ピロウド」短歌二首、山野鐘一「黄色の光」小説、掛布美夜路「さすらひ人」詩、押村月秋「美しき小女よ」詩、露原京二「ルビー」詩、池田多津雄「陰を歩く女」小説、「草の實便り」、表紙画扉画・鈴木龍之、口絵「自画像」セザンヌ

編輯兼發行人の掛布美夜路の経歴などについては不明であるが、第二号の「草の實便り」には（…夜は町を行く美しい女の白い足の見えるのも艶です。私の居る町色では夜更けまで下手な三味線の音がたえませんが、派出なゆかた姿の舞子もたしかに夏の感じを表しております）とあり、また（露臺よりとなりのぞけばほの暗き電燈の下に銀扇のゆらぐ）という掛布自身の短歌とあわせ、彼の住む入江町はどうやら脂粉の香の漂う町であつたようす。入江町は現在の栄二丁目で、広小路の一筋南、本町通と伏見通に挟まれた街区である。次は第三号所収の掛布の「夢」の冒頭の一節である。

空を眞赤に染めてゐた夕陽が沈んでしまうと、今までコバルト色をしてゐた遠くの森は一樣に紺色にかわつて行つた。

彼は果しない夕暮れの野を一人で彷徨てゐた。おりから彼の目の前に一匹の蜘蛛が、細い細い銀の糸にとまつて紺色の空からスウとさがつてきた。蜘蛛の色は白い、そんなに大きくもない、彼はそこに立ち止まつてじつと、それを見つめてゐた。

しかし彼には其れは本當で無い氣がした、けれども、やはりいくら長く見てゐても一匹の小さな蜘蛛である。彼はそこを歩き過ぎ様とした。その時、ふと、みよ子の

事を思ひ出した。こんな時彼女の事を思ひ出すのは一寸と不思議であるが、日頃みよ子が「私本當に蜘蛛は好きよ」その言葉を思ふと、今彼がみよ子の事を思ひ出したのは、當然の事である。みよ子とは去年の冬の初め、まだ若くして、病氣のためこの世を去つた女である。そうして彼の戀人であつた。

ところで、第九号の「草の實便り」において掛布は（こ、まで進んで來た「草の實」を本號かぎりやめる事になりました。小さいながらも九ヶ月の間共に歩いて來た「草の實」をやめてしまふのは本當に寂しい事なのです、しかし今の立場としては、やはりやめるより仕方ありません、これもやはり運命の神のいたづらかも知れませんが、しかし又復活號でも出す事になる様でしたら又今までの様な純な氣持でやつて行きたひと思つております）と記している。

終刊の理由については触れられていない。資金面ではなく他に廢する根拠があつたのであろうか。（又復活號でも出す事になる様でしたら）と敢えて記したのはいくらかでもその見込みがあつたためなのか、わずか三ヶ月ほど後には『草の實』メンバーの池田多津雄、山野鐘一とともに三人で『洎夫藍』を創刊している。

掛布美夜路と『洎夫藍』

『草の實』が『洎夫藍』に生まれかわるにあたり、いかなる経緯があったのかは不明であるが、掛布美夜路、池田多津雄、山野鐘一の三人により、大正九（一九二〇）年五月二五日、『洎夫藍』が創刊された。

編輯兼発行者は名古屋市中区入江町一ノ一の掛布美夜路、発行所は同所の和蘭詩社、印刷所は中区南園町一ノ一の順天堂印刷所（河村敏勝）。創刊号の雑誌サイズは縦横164mm×121mm、三〇ページ。

「清規」には〈和蘭詩社は本當に純な氣持で藝術を讚美する若い人々の集りでございます〉とあり、〈誌友は「詩」「短歌」を「洎夫藍」へ投稿する事が出来ます〉ともある。また「消息」欄には〈九號まで出した「草の實」のある事情のためにやめて三ヶ月とた、ない今日三人の同人によつて「洎夫藍」の生れた事は本當に嬉しい事です〉と書かれている。次は創刊号の内容である。

掛布美夜路「青い酒」短歌八首、山野鐘二「奈良」短歌八首、關山非不美「ある男のうたへる」短歌八首、夢久牧童「白壁」短歌四首、都築美津雄「ゆく春」短歌四首、石川静美「アネモネ」短歌四首、青木宵花「痛ましさ」短歌四首、池田多津雄「幼き二人」小説、掛布美夜路「アトリエ」詩、

夢久牧童「暗夜」詩、土田仙次「野の眞晝」詩、押村令二「雛芥子」詩、山野鐘一「夕」詩、掛布美夜路「夜のペランダ」小説、みよ路・多津雄「初夏の外光」雑誌、「消息」、「清規」表紙画扉画・鈴木龍之、口絵・關山非不美
前記のように掛布の住む入江町は花街のようで「初夏の外光」欄において掛布は次のように記している。

眞晝の街を舞子が三人たかい聲で話をしながら美しい繪日傘をさして歩いて行く姿を見るといかにも夏だと云ふ氣分がする。日本の女に繪日傘は本當にふさわしい。世の中の新しがりやの女がパラソルをさしてゐるのに、色町だけでも昔からのやさしい繪日傘の残つてゐるのがうれしい。

また、池田多津雄は同欄において〈美夜路の骨折で再び「草の實」に代つて「サフラン」がこんなに早く出せる事になつた。ほんとうにうれしい事だ。かうして一度生れる事が出来た以上この雑誌を小さい乍も純潔に美しく育てゆきたい〉とその意気込みを示した。次は掛布美夜路の詩作品「アトリエ」である。

グラス、ウインドから

ひしひしと夜がせまつてくる
アトリエの深いしづもり……。

ソファアーに伏して

ジツト……

動かない男。

卓上の銀皿に

轉がされたロシヤ葉巻の煙
細くゆるやかに流れる。

あたりはプロシヤンブリューに
暮れてゆく暮れてゆく……

掛布は『草の實』第七号所載の詩「或る冷たひ日」にお
いても〈又さびしいアトリエに歸つて来た／ドアを開け
ると眞暗な中から／ぶうんと油がにほふ／ゆかの上に捨て
られた／パレットナイフが冷たく光つてある〉という詩句
をものしているところから、あるいは画家であったのかも
しれない。もうひとつ山野鐘一の短歌「奈良」から三首引
いてみる。

猿澤の汀につきし雪洞の灯影おぼろに花ぞ散り来る
わかくさの山の芝つゆ今消えて陽のさすところにもゆ

るかげろふ

やはらかき言の葉ゆかしいにしえの萬葉びとが戀のご
とくに

前記のように〈一度生れる事が出来た以上この雑誌を小
さい乍も純潔に美しく育てゆきたい〉と同誌への意欲を述
べた池田多津雄、そして「消息」欄には〈次號の原稿は六
月の二十日に締切ります〉と記されているものの、はたし
て『洎夫藍』は何号まで続刊されたのであろうか。第二号
以降の発行については一切不明である。

(きのした しんぞう)